

幡随院長兵衛（ばんずいいんちょうべえ）

～これぞ江戸の華と讃えた唐津生まれの英雄～

大正の末、郷土史家吉村茂三郎氏の調査研究の結果大江戸の華とうたわれた一代俠客幡随院長兵衛は、当地相知久保の生まれであることが明らかとなった。

長兵衛の父塚本伊織は、当時松浦地方の一带を領していた松浦党の一族である鶴田因幡守勝（大河野日在城主）の家臣でここ久保に館を構えていた。

しかし、松浦党盟主波多三河守親（岸嶽城主）が、豊臣秀吉の勘気に触れ、波多家が滅亡したため、伊織は一子伊太郎（後の幡随院長兵衛）を連れて江戸へ発った。伊織は途中下関で病死したが、伊太郎は父の遺命で、幡随院の向導和尚を頼って江戸へ上り、遂に男の中の男と讃えられる身となったという。

当時は、豊臣の天下も大阪夏の陣で終わりをづけ、徳川八万騎の武名が赫々として輝いている時代であった。しかし中には、槍先の巧名を鼻にかけ、傲慢無礼、酒色にふける輩は、徒党を組んで横行するので、江戸町民の歎きは一通りではなかった。

その旗本奴たちの横暴に敢然と立向かったのが幡随院長兵衛であった。しかしその対決の中で、旗本白柄組首領水野十郎左衛門の謀略とは知らず、単身水野の屋敷に乗り込んだ長兵衛は、惨殺されるのである。ときに慶安3年（1650年）4月3日、長兵衛36才であったという。

長兵衛の胸のすくような俠気（男らしさ）は、江戸中の人気を集め、これぞ江戸気質（かたき）の権化と仰がれ、歌舞伎、浄瑠璃、講談などに演ぜられ、江戸文化の華と称えられた。

記念碑は、昭和5年に完成、除幕式は、昭和14年11月角界史に不朽の名を残す大横綱双葉山が除幕の綱を引いて行われた。

総高15メートル、棹石高さ3.6メートル

重さ18トン、七山村狩川より運搬

台石の高さ2.1メートル、重さ40ハトン

題字は、唐津藩主の正統を受継ぐ子爵小笠原長生公によるもので、クレーンなどない当時のこと、この棹石を台石にのせる工事は、大へんなものであったと思われる。

なお接着のセメント等は一切用いてないが、微動だにせず今日に至っている。まさに、日本一の石碑である。

分野 人物

地域 相知

◎地図・写真・統計資料など



幡随院長兵衛生誕地記念碑
唐津市相知町久保地区（長兵衛公園内）

（唐津市フォトライブラリーより）



幡随院長兵衛誕生地の碑

（新岡治生氏より）

◎引用・参考文献（出典）

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

